

語彙的か補助的か

— 「パストン家書簡集」における Dare, Need, Ought (2) —

松 瀬 憲 司

Lexical or Auxiliary:

Dare, Need, and Ought in the Paston Letters (2)

Kenji MATSUSE

(Received October 1, 2009)

Matsuse (2009a) discussed the historical developments of the three minor verbs which can function both lexically and modal-auxiliarily in Present-Day English: i.e., *dare*, *need*, and *ought*, focusing on the situation of the late Middle English period in particular and utilizing the Pastons' 930 letters and documents which were compiled by Norman Davis and published in 1971 and 1976, plus their CD-ROM concordance issued in 2004. But they are only a part of the Paston corpus; we have another 121 papers belonging to it, which appeared in 2005, edited by Richard Beadle and Colin Richmond. The present study was conducted, based on those 121 papers which had not been included in Matsuse (2009a), and aimed to complement it with some additional data.

The findings from all the Paston letters and documents in the 15th and 16th centuries are: the people appearing in those papers used (1) auxiliary *dare* (not only in non-affirmative contexts, but in affirmative contexts as well), (2) lexical *need* (in spite of the fact that auxiliary *need* had already been in use at that time), and (3) auxiliary *ought* which co-occurs with both the bare infinitive and the *to*-infinitive.

Key words : grammaticalization, intervening element, development of the prepositional infinitive, semantic transition, syntactic attraction

1 はじめに

「文法化 [grammaticalization]」とは、その定義を Hopper & Traugott (2003²:18) が “the change whereby lexical items and constructions come in certain linguistic contexts to serve grammatical functions and, once grammaticalized, continue to develop new grammatical functions” としているように、「かつて語彙的要素 [内容語] であったものが文法機能的振る舞い [機能語的要素] を次第次第に身につけていく現象」を指す。英語史の中では、「助動詞 [auxiliary verbs/auxiliaries]」もその文法化プロセスにより誕生した文法カテゴリのひとつであり、このプロセス自体は現代英語 [Present-Day English: 以下 PDE と略す] においてもなお一部で進行中と考えられる。PDE における「語彙 (的) [lexical] 動詞」と「(補) 助 (的) [auxiliary] 動詞」としての働きを、*dare*, *need*, *ought* の三動詞に関して調べた次の (1) を見てほしい。

(1)		<i>dare</i>	<i>need</i>	<i>ought</i>
Lexical	Afm.	△	○	—
	Non-afm.	○	○	—
Auxiliary	Afm.	●	—	○
	Non-afm.	●	●	△

N.B. Afm. = Affirmative contexts, Non-afm. = Non-affirmative contexts, — = no such use itself attested,

○ = *to*-inf. ● = ϕ -inf. & △ = ϕ -inf/*to*-inf

— Matsuse (2009a : 35)

少なくとも *dare* と *need* については、確実に語彙的・助動詞的双方の機能を持っていることが分かる。また、PDE 標準形では助動詞の機能しか認められていない *ought* についても、非標準形及び口語では語彙的用法を確認することができるし、さらに各動詞が肯定文脈と非肯定 (= 否定及び疑問) 文脈のそれぞれで従える不定詞の形

態（前置詞不定詞 [= *to*-inf] か原形不定詞 [= ϕ -inf] か）に注目すると、文脈によっては、従える不定詞に揺れが生じていることが観察できる。この動詞の不定詞形態選択は、語彙動詞用法と助動詞用法を区別するときのひとつの重要な判断基準なのである。とりわけ、いわゆる助動詞は、その多くが「過去現在動詞 [preterite-present verbs]」であったことから、¹⁾ 古英語 [= Old English:OE] 期から既に ϕ -inf との共起が規則だったからである。その点、特に *ought* は、同様に過去現在動詞に起源を持つ身でありながら *to*-inf との共起が規則であるという特殊性を持っており、一般的な助動詞性を逸脱していると言わねばならない。PDEにおいて、*ought to* が *have to* [= *must*] 等と共に「疑似法助動詞 [quasi-modals]」と呼ばれる所以である。

ここで、これら三動詞が従える不定詞形態の歴史的発達を見るために、その初出例の時期について、*OED*² や *MED* の記述をまとめてみると、次のようになる（なお、中英語 [Middle English:ME] 期には、*to*-inf の異形として *for to*-inf が頻出するので、両者をまとめて (*for*) *to*-inf と表示している。また、三動詞の ME での異形については、3節で改めて触れるので、ここ及び以下の表 (4) では PDE 形で呈示する)。

(2)	with (<i>for</i>) <i>to</i> -inf	with ϕ -inf
<i>dare</i>	16 世紀	OE
<i>need</i>	14 世紀	15 世紀
<i>ought</i>	12 世紀	13 世紀

語彙動詞用法を (*for*) *to*-inf と、助動詞用法を ϕ -inf と結びつけて考えるならば、*need* と *ought* は「語彙的から補助的へ」という、いわゆる動詞の文法化の方向に従っているように見え、他方 *dare* は「補助的から語彙的へ」であるから、それに反しているように見える。

では、1425 年から 1510 年にかけて書かれた「パストン家書簡集 [= the Paston Letters:PL]」（その大半は 15 世紀）における書簡番号 1 番から 930 番までの状況はどうであろうか。Matsuse (2009a:50-51) での結論を文言等若干修正の上、以下に掲げる。

- (3) a. PL でも、助動詞 *dare* のみが使用されているようである。ただし、語彙動詞 *dare* の *OED*² 初出例は 16 世紀であるにもかかわらず、1 例だけそれと思われる例が（1465 年の書簡に）発見された。
- b. PL では、語彙動詞 *need* のみが発見された。他の ME 資料から分かるように、助動詞 *need* はこの時代既に稀れではなかったのだが、パストン家の人々は非肯定文脈においてでさえも依然として助動詞 *need* を認識していなかったようである。
- c. 田島 (1990) は、自身が資料とした PL コーパス (selections)²⁾ に助動詞 *ought* と ϕ -inf との共起を報告していないが、今回 9 例を発見することができた。もちろん、*to*-inf との共起が圧倒的に多いという事実は確かに見受けられる。

ところで、PL コーパスは、Matsuse (2009a) で扱った、Norman Davis が編集した 930 番までの書簡で終わっているわけではない (= Davis 2004 [1971/76])。実は、その先が 1051 番まで存在しており、Richard Beadle と Colin Richmond の手により 2005 年に編集出版されている (= Beadle & Richmond 2005)。

そこで本稿では、この Beadle & Richmond (2005) に基づき、15 世紀に書かれた残る 121 の資料を調査することで、英語史上統語的にラディカルな変化が起きたと Lightfoot (1979) が主張する 1600 年よりも前に位置する 15 世紀の状況を示す一例として、PL コーパス全体における上記三動詞の使用状況を明らかにすることを主目的とする。

本稿の構成は次の通りである。次節で、残された PL コーパス #931 ~ #1051 における *dare*, *need*, *ought* の使用状況を確認し、続く 3 節で、それらを含めた PL 全体の状況を総括する。4 節では、これら三動詞の文法化と不定詞形態との関連を再検討し、最後の 5 節で、PL コーパス全体から見えてくるものをまとめることにする。

2 PL #931 ~ #1051 における Dare, Need, Ought

今回の調査結果を三動詞まとめて表 (4) に提示する。

(4)	ϕ -inf	(for) to-inf	Afm.	Neg. ³⁾	Aux.	Lex.	Amb.	TOTAL
<i>dare</i>	13	1	5	9	14	0	—	14
<i>need</i>	1	4	3	2	1	2	2	5
<i>ought</i>	11	7	15	3	18	—	—	18
TOTAL								37

N.B. Afm. = Affirmative contexts, Neg. = Negative contexts, Lex. = explicitly Lexical uses, Aux. = explicitly Auxiliary uses,
& Amb. = Ambiguous uses

そして以下、それぞれの動詞について議論のポイントを例示していく。

まず、*dare* を見てみよう。Matsuse(2009a) で指摘した PL コーパスでの *dare* と ϕ -inf との共起率の高さは、今回調査した #931 ~ #1051 でも盤石で揺らぐことはなく、それは当時の *dare* の助動詞用法を強く示唆している。ただし、下例 (5) に注目してほしい。

- (5) a. for it is so good thynge that I *dare not take* upon me to trusse it, **nor to medle** with all.⁴⁾
(1492, #943, ll.120-21, WP2/TCr)⁵⁾
- b. And therefore the seid Dallyng seith he *dar not*, bothe for fer and for perel of his othe, **non ferther to lete** you haue knowlege in no wyse.
(1448, #964, ll.17-18, ThH & GS/SJF)

動詞と不定詞間の「介在要素 [intervening elements]」の存在が、動詞に内在されている統語的な指定を越えて、当該動詞が従える不定詞形態選択に関わることはよく知られているが、これは文の知覚処理に起因する現象として捉えられている。一般的（法）助動詞に特有な、 ϕ -inf との直接連鎖は、ある種例外的なものであると想定すると（一般的語彙動詞は、通常 ϕ -inf ではなく、前置詞不定詞と「直接」連鎖するからである⁶⁾）二通りの解釈が可能である。

- (6) a. 介在要素があるからこそ、動詞と不定詞との直接接触を避けることができるので、知覚的安定感が与えられ、当該不定詞には不定詞標識が不要になる。従って、 ϕ -inf が現れる。
- b. 介在要素があるために、動詞と不定詞との関連性が知覚されにくい環境ができ、それを補うという目的で、新たに当該不定詞に不定詞標識が必要になる。従って、(for)to-inf が現れる (Fischer 1992: 322-324 参照)。

(6a) は、助動詞 *dare* が非肯定文脈で好まれるという（特に PDE の）傾向をうまく説明するように思われるし、実際これは表 (4) の分布からも確認できる。具体的には、(5a) の *take* がこれに当たり、他方 *to medle* での不定詞標識の出現は、今度は逆に (6b) で説明されなければならない。そして、(5b) の *dar* には、それが明らかに助動詞であるのにもかかわらず、(for)to-inf である *to lete* が現れていることから、(6b) の解釈が必要になってくる。

こういった介在要素としては、否定辞だけでなく、下例 (7) のように副詞も現れ得る。これは、副詞を介在させることによって、肯定文脈においても知覚的安定感を実現できる構造と言えるだろう。

- (7) a. for I *der well sey* that I have her at þis tyme all the chef schyppys of Duche lond,
(1449, #968, ll.50-51, RWt/TDI)
- b. I *dar saufelye seye*, and my seyde fader had a son of hys owne body begeten;
(1451-52, #1013, ll.53-54, SS)

さらに、Matsuse (1987:43) で指摘したように、14 世紀に書かれた *The Canterbury Tales* において既に、(7a) に見られるような “I *dar wel sayn*” という表現が頻繁に現れることから、この構造は 15 世紀においても一種の「安定した」定型表現として定着していたものと考えられる。

次に、*need* についてはどうであろうか。(2) で指摘したように、助動詞 *need* が新たに英語史に登場するのは、丁度このバトン家の人々が生きた 15 世紀なのである。しかし、実際使用されていた *need* のほとんどは、(for)to-inf を従える (8) のような語彙動詞 *need* の方であった。

- (8) such materes as ye **shall nede to labour** or **moeffe vnto** my lord of Norffolk that hys goode lordshyp may help
&c,
(1450, #988, ll.41-42, SJF/ThH)

助動詞 *shall* との共起を考慮すると、ここでの *nede* は間違いなく語彙動詞と分かる。同様に、次の (9a) も、*need* 自体が屈折語尾を持っているので、語彙動詞である。そして、(8)・(9a) とともに (for) to-inf と共起している。⁷⁾ ところが、(9b) は、明らかに助動詞 *nede* であり、しかも (9a) と同じ否定文脈で ϕ -inf と共起している。

今回のコーパスで唯一発見された助動詞 *need* の例である。

- (9) a. it *nedeth* **you not** to haue any letter from hym, (1492, #943, ll.105-106, WP2/TCr)
 b. It *nede* **not** expresse you the namys ne the causys, for ye have remembraunces wyth you of hem.
 (1450, #993, ll.18-20, SJF/ThH, SWJ, & JBo)

おもしろいことに、(8) と (9b) は、1450 年に Sir John Fastolf という人物⁸⁾ から発信された書簡に現れており、実は、この人物、もう一例 *need* を使用している。次の (10) である。

- (10) And now at thys tyme or onye othyr tyme where ye *nede* to hafe help to solicit wyth you to myne avayle,
 (1450, #989, ll.128-29, SJF/ThH & WBr)

これは (表 (4) では、決定的な証拠がないので Amb. にカウントしているが)、おそらく (8) 同様語彙動詞 *nede* と考えられ、また両者共に肯定文脈で使用されていることから、まず否定文脈の方から助動詞 *need* が広がった可能性を示唆しているのではなかろうか。

さらには、(9) はいわゆる「非人称構文」である点も指摘したい。Fischer (1992: 319&405) は、ME 期に *moste* [= *must*] など法助動詞の多くがこの構文に現れていたとし、“*Need* was in Middle English still an impersonal verb and consequently appeared with the plain [= ϕ -inf] as well as the *to*-infinitive, although the latter is more frequent” と述べている。このように、*need* は (*for*)*to*-inf との共起が優勢だったものの、そこに ϕ -inf が現れることも決して珍しくなかったという事実は、 ϕ -inf を従える助動詞化の流れにうまく適合していたと言えそうである。

最後に、助動詞 *ought* について議論する。まず、下例 (11) を見てみよう。

- (11) a. then I wol do to you as **me** *oght* to do, (1429-33, #954, ll.12-13, SJF/SS)
 b. And myn auditours *oght* **not** take straungelie **none** mater that ye or my seruantes meoffe or wryte on my behalf and by my commaundment. (1451, #1005, ll.56-58, SJF/ThH & JBW)

(11a) は (9) と同じ非人称構文である。Fischer (1992: 405) は、*ought* が (*for*) *to*-inf だけでなく ϕ -inf と共起するようになった理由のひとつとして、この非人称構文での使用が引き金になったことを挙げているが、(11b) の場合、代名詞ではなく普通名詞が生起しているために、これが ϕ -inf を従えた非人称構文であるかどうか定かではない。ただ、少なくとも上記 *dare* のところで述べた、知覚処理上の優位性から ϕ -inf が生起した可能性も捨てきれないと思われる。その介在要素の議論からすれば、下例 (12) は興味深い材料を提供してくれる。

- (12) a. than me semeth I *oght* **the better** to haue hys gode grace, and **nat** to be rebuked for my pitous compleint. (1451-52, #1013, ll.62-63, SS)
 b. And therefore y *oght* **not ne wolle not** pay for now. (1454, #1015, ll.8-9, SJF/ThH)

(12a) では、介在要素である副詞の存在が第一不定詞 *to haue* での ϕ -inf の使用に繋がっていないが、第二不定詞 *to be rebuked* では、介在要素が存在するために不定詞標識が出現していると考えられる。⁹⁾ これに対して、(12b) では、知覚的にはかなり重たい介在要素があるにもかかわらず、 ϕ -inf が現れている。当然のことながらここでは、おそらくもう一つの助動詞 *wolle* が *oght* と並置されている点が大きく影響しているのであろう。このような実際に他の助動詞と並置される環境だけでなく、 ϕ -inf との共起が規則である他の、意味的に類似した助動詞からの「類推 [analogy]」(特に、four-part analogy [Hock & Joseph 2009²: 157]) もまた、助動詞 *ought* が ϕ -inf と共起しやすい状況を作り出してきたと考えられる (田島 1990: 236 参照)。ちなみに *OED*² では、 ϕ -inf と共起する助動詞 *ought* の例が 19 世紀まで挙げられており、現在は「廃語 [obsolete]」もしくは「古語 [archaic]」と記述されている。そして、下例 (13) では、ついに、非人称構文ではなく、明らかに人称構文において ϕ -inf と共起する助動詞 *ought* が現れている (上例 (11a) も人称構文である可能性は十分にある)。

- (13) yf any othyr thyng that I haue ellys ys ymagyned or demyd yn my gouernaunce that I *oght* bryng wyth me,
 (1470, #1046, ll.50-51, WWr/WWf)

3 PL #1 ~ #1051 における Dare, Need, Ought

3.1. Dare

表 (14) は、Matsuse (2009a) に掲載した表に、今回新たに得られたデータを含めたものである (以下、3.2. 節の *need* 及び 3.3. 節の *ought* についての表でも同様の処理を施す)。

(14)	Variants	Afm.	Neg.	Infinitives
	<i>dar</i>	17	23	ϕ -inf & <i>to</i> -inf (39 : 1)
	<i>dare</i>	11	15	only ϕ -inf
	<i>darre</i>	5	1	only ϕ -inf
	<i>darenot</i> (one-word form)	–	2	only ϕ -inf
	<i>der</i>	1	0	only ϕ -inf
	<i>durre</i>	0	1	only ϕ -inf
	<i>durst</i>	7	23	ϕ -inf & <i>for to</i> -inf (29 : 1)
	<i>durste</i>	4	2	only ϕ -inf
	TOTAL	45 [40.2%]	67 [59.8%]	112

まず、異形については、*der* (上例 (7a)) と *durre* (下例 (15)) が今回新たに見つかった。

(15) *perfore they durre not ensele.* (1422/23, #951, 1.10, HN/SHB)

その中で後者の *durre* だが、*MED* (s.v. *durren*) に指摘があるように、一見すると複数形主語 *they* に対する現在時制定形形態のように感じられるが、次の (16) では、同じ複数形主語にもかかわらず、*dare* が現れていることから、この当時はもう既に単数現在形への統一 (文法化の進行) が相当進んでおり、単なる一変異形となってしまっていたと見なすべきだろう。

(16) *thei, for doute of here lyves, dare not go home to here houses* (1449, #36, 1.47, JP1/KH6)

次に、否定文脈での生起数を見ると、ほぼ6割とかなり高そうに見えるが、寧ろ肯定文脈において、4割も助動詞 *dare* が使用されている事実の方に注目すべきである。と言うのも、PDE でのその活動領域は非肯定文脈に限られてしまっているからである。つまり、16世紀以降、本格的に語彙動詞 *dare* が登場して後は、助動詞 *dare* の機能範囲が大きく狭められたことを意味している。

介在要素と不定詞形態の関わりについては、下例 (17a) と (17b) を比較すると分かるように、知覚上障害となる要素の長さにこれと言った決まりはなく、あくまでも相対的なものであると考えられる。

(17) a. *And therefore the seid Dallyng seith he dar not, bothe for fer and for perel of his othe, non ferther to lete you haue knowlege in no wyse.* (= 5b)

b. *seruantz ne durst not at here fredom nothyr goo ne ryde* (c1426, #5, ll.35-36, WP1/MA)¹⁰⁾

(17a) には間違いなく (*for*) *to*-inf が現れているが、この *dar* は屈折していないことから、助動詞 *dar* であることは明白である。比較的長い介在要素があるために不定詞標識を必要としたのだろう。しかし、同じ理由で (*for*) *to*-inf が現れてもおかしくはない (17b) では、何故かそのまま ϕ -inf が生じている。その (17b) に比べると、次の (18) は異様に映る。あれだけの知覚上の障害要素があるにもかかわらず、(17b) では ϕ -inf が使用されているのに、(18) では *not* 一語の介在のみで (*for*) *to*-inf が現れているからである。

(18) *they seyde they durst not for to take vppon hem for to be bonden,* (1465, #182, ll.12-13, MP/JP1)

このことから、(18) の *durst* は、確かに形態上過去形屈折語尾を持つ *dared* となつてはいないが、語彙動詞 *dare* である可能性が極めて高い。*OED*² (s.v. *dare*) に掲載されている語彙動詞 *dare* の過去形の初出例においても、*dared* ではなく *durst* が見られることも、その可能性を強く支持している。

(19) *The counsell neither durst to abridge or diminish any of them.*

(c1555, Nicholas HARPSFIELD, *A Treatise on the Pretended Divorce between Henry VIII and Catherine of Aragon* [1878], 269)

以上、PL コーパス全体を見渡して、*dare* に関しては、(*for*) *to*-inf の生起率がわずか2例の1.8%であることから (そのうち語彙動詞 *dare* の可能性があるのはわずか1例のみ)、パストン家の人々を含めてこの時代の人々が使っていた *dare* には、まだ助動詞用法だけしかなかったと言っていい。ただ、それがPDEの助動詞 *dare* と大きく違う点は、語彙動詞 *dare* がまだ全く発達していないので、肯定文脈もその十分な機能範囲となっている点と言えよう。

3.2. Need

今回新たに *need* の異形は発見されなかったが、2節で指摘したように、 ϕ -inf を従える助動詞用法と思われるものがわずかに1例だけ見つかった。¹¹⁾ (21) としてここに再掲しておく。

(20)	Variants	Afm.	Neg. ¹²⁾	Infinitives	Aux.	Lex.	Amb.
	<i>ned</i>	0	2	only <i>to-inf</i>	0	0	2
	<i>nede</i>	6	10	ϕ -inf & <i>to-inf</i> (1 : 15)	1	8	7
	<i>neede</i>	0	2	only <i>to-inf</i>	0	1	1
	<i>nedis</i>	0	1	only <i>to-inf</i>	–	1	–
	<i>nedith</i>	1	2	only <i>to-inf</i>	–	3	–
	<i>nedyth</i>	0	5	<i>to-inf</i> & <i>for to-inf</i> (3 : 2)	–	5	–
	<i>nedid</i>	0	1	only <i>to-inf</i>	–	1	–
	<i>nedyd</i>	1	2	only <i>to-inf</i>	–	3	–
	TOTAL	8[24.2%]	25[75.8%]	33	1	22	10

(21) It *nede* **not** expresse you the namys ne the causys, for ye have remembraunces wyth you of hem. (= 9b)
 さらに、(21)に見られる以外の *need* は全て前置詞不定詞と共起していることから、それらはおそらく語彙動詞 *need* と考えられる。また、*to-inf* の異形である *for to-inf* を従える例もあるので、以下に示す。

(22) *Pe goune nedyth for to be had* (1440, #13, 1.9, AP/WP1)

この *need* に関しては、それが助動詞にせよ、語彙動詞にせよ、*dare* とは異なり、否定文脈での使用が7割を越えており、PL コーパスでは、*need* の生起しやすい環境と見なすことができる。他方、(22)に見られるような肯定文脈の場合、ほとんどの例が不定詞との直接連鎖を示していたが、*need* と不定詞間に介在要素を持つ (23) のようなタイプも散見された。

(23) *Ye nede at this tyme rather to have had three solicitours than in any other terme past this iij yere,* (1460, #601, 11.14-16, UN/JP1)

このように PL コーパスでは、助動詞 *need* は依然として未発達である。元々名詞から創られた語彙動詞 *need* に、14世紀から (*for*) *to-inf* と共起する構文が現れ始めた頃は、(24)に見られるような、同じ意味を持ち、 ϕ -inf を従える助動詞 *thar* [<OE þurfan] が平行して使用されていた。そのうちこの *thar* が廃用になる中で、*thar* から *need* へ「意味の移譲 [semantic transition]」と同時に「統語的牽引 [syntactic attraction]」が生じたために、語彙動詞 *need* と助動詞的「解釈」が結びつくようになり、 ϕ -inf との共起も成立し始めたのであろう。

(24) *He thare have non excuse for defaute of leysar,* (1463, #172, 11.9-10, MP/JP1)

3.3. Ought

今回見つかった新たな異形は、Sir John Fastolf の書簡に現れる *ought* であり、*to-inf* との共起のみだった。(26)に提示する。

(25)	Variants	Afm.	Neg.	Infis:	ϕ -inf	<i>to-inf</i>	<i>for to-inf</i>
	<i>aghte</i>	1	0		0	1	0
	<i>aught</i>	1	1		0	2	0
	<i>oght</i>	3	1		0	3	1
	<i>ought</i>	31	5		19	17	0
	<i>oughtnot</i> (one-word form)	–	1		0	1	0
	<i>owght</i>	3	1		1	3	0
	<i>owghte</i>	2	0		0	2	0
	TOTAL	41[82%]	9[18%]	50	20[40%]	29[58%]	1[2%]

(26) a. *for hit is to moche for on to occupy weel as hit aught to be,* (1450, #978, 11.34-35, SJF/ThH, WC, & WS)

b. *the langage vpon wheche he is endyted be sent heder, for that aught not to be kept prevyte, but oplyshed,* (1450/51, #998, 11.2-3, SJF/probably ThH)

そして、(26a) と次の (27) を比較してもらいたい。

(27) *and I doubt me lest it ys but litill attended as it ought bee.* (1450, #981, 11.28-29, SJF/ThH)

Sir John Fastolf の書簡には、*ought* だけでなく、(26) のような異形 *aught* も現れること自体はよいとして、それらが使われている環境が、PDE形にすると “as it *ought to be*” という全く同じ構文であることを考え合わせると、一個人の用法の中でその従える不定詞形態にも揺れがあるという事実は非常におもしろい。さらにおもしろいこ

とには、同一書簡 (#982) の中でさえその揺れが確認できるのである (しかも (28b) には、別の異形 *owght* まで現れている)。

(28) a. and whethyr Fouler or onye othyr man *ought distreyn* withynne my lordshyp,
(1450, #982, ll.8-9, SJF/ThH)

b. and that ye wolle I moeffe and counsell Jankyn to owen myne tenauntes gode wille as he *owght to do*.
(1450, #982, ll.22-23, SJF/ThH)

ここで、上表 (24) を簡略化した以下の表 (29) を見てみよう。

(29)	Infinitives	Afm.	Neg.	TOTAL
	ϕ -inf	17	3	20 [40%]
	(for) to-inf	24	6	30 [60%]
	TOTAL	41 [82%]	9 [18%]	50 [100%]

PL コーパスで助動詞 *ought* が ϕ -inf を従える率は 4 割である。ちなみに、同時期 (a1500) に書かれた散文の *The Secrete of Secretes* における助動詞 *ought* について見てみると、 ϕ -inf: (for) to-inf = 7:15 で約 32% であった (松瀬 1996: 70)。どうやら、この時期ある程度の割合で、*ought* とともに ϕ -inf が自由に使われ得る状況があったと考えてよさそうである。

表 (29) では、両不定詞ともに肯定文脈での使用が目立っているが、特に ϕ -inf との共起の場合、介在要素を持つ例は以下の 3 例のみであった。このうち、(31) は *ought* と他の助動詞との並置という、 ϕ -inf が生じやすい特殊な状況であるとする、(30) が唯一の純粋な介在要素を持つ例と言える。

(30) who *ought more halde* wyth me yn reson (1460, #888, l.22, WWr/JBW)

(31) a. þe goode rewle and mesure þat ze *owght and sholde haue* yn þe despociscion
(1464, #694, ll.31-32, UN/JP1)

b. And for deffault of thys ouersyght it makyth my bayllyffs be yn gretter arré then they *ought or wold bee*;
(1451, #1009, ll.75-76, SJF/ThH)

助動詞 *dare* については、否定文脈で使われることが多い中で、肯定文脈で使われた場合も ϕ -inf との直接連鎖が珍しくないという印象だったが、助動詞 *ought* は、そもそもが (for) to-inf との共起が規則である中で、肯定文脈においてもこれだけの ϕ -inf との直接連鎖が可能であるという状況を示していることになる。つまり、*ought* には「 ϕ -inf と共起する」というオーソドックスな助動詞の振る舞いを受け入れる素地がもともとあったということであろう。

以上まとめると、PL コーパスにおける助動詞 *ought* は、Sir John Fastolf が身をもって示しているように、必ずしも介在要素がなくても容易に ϕ -inf を従えることができたようである。それは、使用者が、従える不定詞形態を無意識のうちにスイッチできたことを意味しており、当時から *ought* という「動詞」の捉え方に、ある一定の幅があったことを示していると考えられるだろう。¹³⁾

4 文法化と不定詞形態との関わり

この節では、前節まで議論してきた PL コーパスにおける *dare*, *need*, *ought* の振る舞いに基づいて、より根本的視点から英語史でのそれらの機能変遷について再考する。

「内容語から形式語へ」というのが一般的な文法化の型ではあるが、「語彙動詞から助動詞へ」という流れには、どうやら二通りあるようだ。

不定詞を直接従える助動詞について考えた時、¹⁴⁾ 元来語彙動詞としてもある意味「軽い、基本的な、色があまり付いていない」*do* の場合は、疑問・否定形でのオペレータ機能「自体」への文法化が際立っており、その統語機能の面が非常に強調されているように思われる。これに対して、いわゆる法助動詞は、機能的にはいかにそれが補助的オペレータになっているとは言え、ここに顕著な意味漂白は見られず、むしろ逆に「重要な」法的意味内容を改めて背負うようになったと言えるのではないかと (その受け継いだ意味をベースに、法助動詞間で意味の受け渡しがあり、「義務的 [deontic]」から「認識的 [epistemic]」へ、さらには、「主観化 [subjectification]」の強化という文法化の道を辿ったということはよく理解できるのだが)。それもそのはずで、(システムの内容としては甚だ不十分なものであったが) OE 期には一応完備されていた、定形動詞の法 [mood] を表す屈折体系が ME

期を通じて徐々に崩壊・喪失するに及び、かつての法的意味を屈折語尾ではなく「独立語として」担う新しいカテゴリーの必要性が高まった結果、(ϕ -inf と共起する) ある一群の語彙動詞¹⁵⁾に、いわゆる法助動詞的な機能が強化・拡張されたという経緯があるからだ (Warner 1993: 172&183 参照)。

また、形式・形態面においても両者が対照的なのは、助動詞は文の定形動詞を担うので、助動詞 do の場合、人称・数・時制に関して屈折 (do, does, did) するのに対して、法助動詞は、時制に関しては一部を除き屈折するが (しかも、その「過去」形は必ずしも過去を指示しない)、人称・数に関しては屈折しない点である (例えば、can, could; may, might; must, -; etc.)。これは、法助動詞の多くが過去現在動詞から発達していることによる。結局、(32) のような分布が浮かび上がる (表中「+」は「維持」、「-」は「喪失」を表す)。

(32)	助動詞 do	法助動詞
意味	-	+
定形形態	+	-

そう考えてくると、後者は確かに法「助動詞」と呼ばれるが、どれくらい我々はそれを「補助的」なものとして捉えているのだろうか。形式 (統語) 的に見れば、文の中心を担う動詞成分となる ϕ -inf を従えるという点で明らかに (補) 助 (的) 動詞の特徴を有している側面があるとは言えそうだが、それが実際文全体の意味に関して担う重要度はむしろかなり高いと考えられ (Warner 1993 の言う「sentence modifier」)、語彙動詞が持つそれと比較しても遜色はないのではないか。Kuteva (2001: 11) は、助動詞を「補助 (動詞) 化 [auxiliation]」の過程から不可分であると捉え、殊にここで議論しているような、その語彙的とも補助的とも言える性質を次のように述べて説明しようとする、“depending on the length of the stretch auxiliaries occupy on the Verb-to-T [ense] A [spect] M [odality] chain, and their location along the chain, they will be more grammatical or less grammatical”。ここでの Verb-to-TAM chain とは、「文法化の鎖 [grammatical chain]」のことを指し、そこには、“the different stages of the lexical-to-grammatical development of linguistic entities correspond to successive, intermediate links in a chaining structure” という状況があると指摘される (Kuteva 2001: 117)。

もうひとつ、この「語彙的から補助的へ」という文法化 (補助化) の問題には、不定詞自体の発達が絡んでいる。OE 期にはその機能が一部に限定されていた前置詞不定詞 (*to*-inf) は、ME 期に入り、その範囲を飛躍的に伸ばしていくことになる (Mustanoja 1960: 514)。これには、不定詞における *to* 自体の文法カテゴリーが「方向を表す前置詞」から、「不定詞標識」へと文法化を遂げたことが大きく関わっており、OE 期から ME 期にかけて不定詞をマークする屈折語尾の崩壊・喪失に平行して起こった現象と捉えることができよう。Los (2005) は、これに加えて、接続法 [subjunctive mood] を含む「定形節」の衰退を補う手だてとして、非定形節 *to*-inf の発達が既に OE 期から見られると主張している。つまり、これは、その屈折体系が崩壊していく中で、接続法を新たに体現する形式として *to*-inf が大きくクローズアップされ、ある意味 *to* そのものに法性 [modality] が付与されるようになったとする見方である。してみると、 ϕ -inf を従えることが規則的助動詞は、そもそも自らに法性を持っているわけだから、直接従える不定詞にわざわざ法性をマークする必要がないとも言えるわけで、逆に、ME 期から発達してきた (助) 動詞 *ought* は、新たなカテゴリーとして再解釈された (*for*) *to*-inf と共起することで、法性を手に入れることができたとも言える。

以上のことを念頭に、それでは、*need*, *ought*, *dare* 個々の場合についても一度考えてみよう。

まず、*need* の場合、いわゆる語彙動詞から出発しており、(*for*) *to*-inf との共起が規則であった。それが、非人称構文などでの使用を通して、たまたま ϕ -inf も従えることができるようになり、その ϕ -inf との共起に引きずられる形で助動詞化が進行したのか、あるいは、助動詞用法が何らかの形で先に成立し、そこに語彙動詞時代の (*for*) *to*-inf が生ずるパタンが中間段階として出現した後、最終的に助動詞 *need* として確定的に ϕ -inf を取る形ができあがったのか、判然としない。PL コーパスにおいては、前節表 (20) の中で、語彙動詞か助動詞か形態上明確に判断できないもの (主語が一・二人称単数及び複数現在の場合) を Amb [iguous] のカテゴリーに分類した。例えば、以下の (33) である。

(33) me semez **ze nede** to take gode auyse and counsell for 3our owne ese and profuyte,

(1422/23, #951, l.10, HN/SHB)

果たしてこの二人称複数主語 *ze* を持つ *nede* は、語彙的か補助的か。このように、語彙動詞 *need* に起こったのは、 ϕ -inf との共起が可能になったことが先か、助動詞としての用法が生じたことが先か、という問題は依然として残るが、少なくともそこには、助動詞 *thar* から動詞 *need* への「意味の移譲」と「統語的牽引」から成る言語的バトンタッチが絡んでいたと考えられる。ただ、PDE において *need* の助動詞用法が非肯定文脈を指向するとい

う特徴は、それが新規に助動詞化したことによる構造的不安定さに起因しているのではなからうか。つまり、非肯定文脈では、否定辞 *not* や疑問文における倒置主語を助動詞 *need* と ϕ -inf 間に置くことによって、構造的安定を得ることができるのである。

次に *ought* だが、疑問文や否定文における助動詞 *do* の使用が飛躍的に伸びる時期は16世紀であり（橋本2005: 169）、それ以前は語彙動詞も法助動詞も同じやり方で疑問形・否定形を作っていたことから、英語母語話者には、これはいわゆる「助動詞」とは捉えられておらず、おそらく当初からその意識はほとんどなかったのではないかと、確かに、**oughts* や **oughted* などが発見されないことは、*ought* がいわゆる語彙動詞としては決して扱われていなかったことを示唆するが、特に形態及び機能上 *might* と酷似していることを考えると、「過去形」を現在の意味で人称によって変化させずに使用する「やり方自体」に何ら違和感はないし、だからこそ、当時 ϕ -inf との共起もスムーズに受け入れられたと言うこともできよう。それよりもむしろこの *ought* は ϕ -inf ではなく、(*for*)*to*-inf との共起でスタートしているわけだから、一般的語彙動詞という感覚の方が強く感じられていた可能性は非常に高い。それを我々はただ機能上、「(準)助動詞」と分類してきたということに過ぎないのではないかと。¹⁶⁾ 佐久間(2009: 48-49)で紹介されているのだが、PDE の下例において、

(34) You *ought* know by now how much....

ある英語母語話者 AET は、“I would personally add *to* after *ought*, but that isn't necessary.” と授業で学生に説明したそうである。これは、*ought* が ϕ -inf と共起するという、いわゆる純正「助動詞」としてのステータスが、非肯定文脈だけでなく、肯定文脈においても十分許容されることを示しており、そういう意味での文法化が進行していることを表している。¹⁷⁾

このように考えてくると、*need* も *ought* も「語彙的から補助的へ」の流れに十分に即していると言えよう。では、*dare* はどうであろうか。Fischer (2007: 192) は、「補助的から語彙的へ」という逆方向の展開もあり得ないことではないことを Burridge (1998) を引用して述べているが、¹⁸⁾ そこにはしかし特別な「社会文化的環境」が絡んでなければならないとしている。この *dare* にそのような特別な環境を見いだすことはなかなか難しいが、敢えて言うならば、ふたつ考えられる。

ひとつは、まず、ME 期に形態的にも意味的にも *dare* とよく混同されていた助動詞 *thar* が (*MED* s.v. *durren*, Fischer 2007: 189 を参照)、助動詞 *need* に取って代わられることで、東中部方言から消失していく過程があった。それと平行して、*dare* においても ϕ -inf と共起する助動詞としてのステータスが弱まっていき、動詞 *dare* は新たに語彙動詞としての「再解釈」を受ける事態が起こったために、*to*-inf との共起を確立させていった可能性である。もうひとつの考え方は、Los (2005) が言うように、不定詞標識 *to* 自体に一定の法性を負わせるとしたら、*dare* が必ずしも法助動詞である必要性はなくなるわけで、容易に語彙動詞へとシフトできることにもなるだろう。

5 まとめ

Matsuse (2009a) を補完するために、未調査だった「パストン家書簡集」書簡番号 #931 ~ #1051 における動詞 *dare*, *need*, *ought* の使用状況を分析した結果、15 ~ 16 世紀に書かれた 1051 通からなる「パストン家書簡集」全体では、

- (35) a. 語彙動詞 *dare* の可能性があるものが僅かに1例見られたが、あとは全て助動詞 *dare* であった。ただ、現代英語での状況とは違って、中英語後期のこの時期、助動詞 *dare* は肯定文脈においても十分に使用されている。
- b. *dare* とは逆に、使用されているほとんど全てが語彙動詞 *need* である中で、助動詞 *need* の可能性があるものが1例だけ見つけた。既にこの頃、助動詞 *need* は使用され始めていたと考え合わせると、パストン家の人々はまだその新しい用法を認識していなかったと言える。
- c. 確かに、*ought* は *to*-inf との共起でスタートしたが、パストン家の人々は ϕ -inf との共起も十分に許容している。これは、Sir John Fastolf のように、一個人の内でも使用の揺れがあったことを示しており、彼らの動詞 *ought* の捉え方を如実に表していると言える。

ということが明らかになった。

これらマイナーな動詞、*dare*, *need*, *ought* について、「文法化」に絡む「語彙的か補助的か」という問題を考えるとき、パストン家の人々が生きた15世紀から見えてくるものは、ふたつある。

①この時期、 ϕ -inf と共起する助動詞 *thar* が（後に標準形の中心となる）東中部方言から消失しつつあったことが、一方で、その意味及び機能上の類似から助動詞 *need* を成立させ、他方で、その形態上の類似から語彙動詞 *dare* を成立させる下地を創出した。

② *ought* は、形態的には過去現在動詞の過去形であるが、当初より *to*-inf を従えたことから、むしろ語彙動詞的振る舞いをしてきており、使用者の側に純然たる「助動詞」との意識がもともとなかった。しかし、従える *to*-inf そのものが法性を受け継いだ可能性とともに、他の法助動詞が持つ形態・構造との類推などから、 ϕ -inf との共起も許容するようになり、助動詞的性格もまた徐々に身につけていった。ただ、*to*-inf と共起する流れはその後も温存され続け、現在に至り（主に非肯定文脈においてであるが）その助動詞的性格をようやく強めつつある。

従って、16世紀に助動詞 *do* が定着し、語彙動詞と法助動詞の棲み分けがきちりと確立していく以前に、これらマイナーな動詞群には、「語彙的か補助的か」を巡る大きな転換点が訪れていたと断言するのはなかなかろく。

註

- 1) 過去形が現在形として使用されるメカニズムは、前者の「遂行的 [performative] 言語使用」による反事実的 [irrealis]・丁寧な [polite] 用法から派生したと Fischer (2007: 180) は見なしている。
- 2) これは、Norman Davis, (ed.), *Paston Letters*, (Oxford: Clarendon Press, 1958) のことである。
- 3) PL コーパスでは、三動詞の「疑問」文脈での使用は殆ど発見されなかったもので、以下「非肯定 [= Non-Affirmative]」文脈ではなく、「否定 [= Neg (ative)]」文脈として提示する。
- 4) 表 (4) には、当該動詞が従える第二不定詞以降の数字は含まれていない。従って、(5a) は、 ϕ -inf との共起例としてのみ処理している。
- 5) 例文が含まれる手紙や書類に関する情報は、次の順序で括弧内に記載する。(1) 書かれた年、(2) Beadle & Richmond (2005) で付された書類番号、(3) 例文が出てくる行番号、そして (4) 斜線の左側に発信者・右側に受信者を以下に記載する略号で示したもの（斜線がない場合は、その書類の筆者を指す）。例えば、(1449, #968, ll. 50-51, RWt/TDI) であれば、「1449年に書かれた、書簡番号 968, 50～51行の文で、発信者は Robert Wenyngton, 受信者は Thomas Daniel」を表す。略号は以下の通り。
RWt: Robert Wenyngton, **TDI:** Thomas Daniel, **SS:** Stephen Scrope, **WP2:** William Paston II,
TCr: Thomas Carey, **ThH:** Thomas Howes, **GS:** Geoffrey Spirleng, **SJF:** Sir John Fastolf,
SWJ: Sir William Jenny, **JBo:** John Bokkyng, **WWr:** William Worcester, **WWf:** William Wainfleet,
WBr: William Barker, **HN:** Henry Nottyngham, **SHB:** Sir Henry Barton, **JPI:** John Paston I,
KH6: King Henry VI, **WP1:** William Paston I, **MA:** memorandum to Arbitrators, **MP:** Margaret Paston,
AP: Agnes Paston, **UN:** unidentified, **WWt:** William Wayte, **WC:** William Cole, **WS:** Walter Shipdam, &
JBW: John Berney of Wichingham.
- 6) 例えば、“let go”では感じられるが、“can do”では感じられない、二動詞が直接繋がることへのある種の「違和感」のことである。
- 7) *moeffe* は確かに ϕ -inf だが、これは *nede* に連なる第二不定詞の位置にあり、第一不定詞の *to labour* が既に不定詞標識を搭載していることから、ここではそれを省略したものと理解され、全体では、(*for*) *to*-inf を従える語彙動詞 *nede* と判断される。
- 8) ギース&ギース (2001: 91-95) によれば、この Sir John Fastolf は、百年戦争歴戦の勇士で、その法律顧問をパストン家の William と John が引き受けていたのである。また、Shakespeare の *1 & 2 King Henry IV* などの作品に登場する「フォルスタッフ」は彼の名前のアナグラムである。
- 9) 上註 6) とも関わることだが、Fischer (1992: 323-24) は、第二不定詞に *to* が現れることについて、“the function of the second *to* is not simply limited to that of increased infinitive marking, but that it may add something extra to the meaning of the sentence. The second *to*-infinitive often conveys the aim or result of the action expressed by the first infinitive, or indicates the next stage in the proceedings.”と述べ、“A note of authority and pre-ordainedness is often conveyed by *to*.”と指摘している。
- 10) #1～#930の資料における情報提示は、註 5) に準ずる。
- 11) (21) が今回発見された唯一の助動詞 *need* の例としたが、以下の *nede* にもその可能性はある。
 i) ye may haue redy youre rescuse þat it *nede* **nomore** to send þer-fore. (1469, #204, ll.46-47, MP/JP2)
 しかしこの場合、*nede* は þat 節内にあるので、語彙動詞 *need* の仮定法現在形である可能性が高い。また、*nomore*

- のみという短い介在要素で *to*-inf が現れていることから、今回語彙動詞と判断した。
- 12) 上註 3) で、疑問文脈はほとんどなかったと述べたが、下例 ii) は、再検討の結果、その可能性があると考えられるので、Neg. のカテゴリーの方に分類している。
- ii) for what *nedyth the Kyng for to have the tax of hese pore puple...* (1451, #471, l.8, WWtJP1)
Matsuse (2009a) では、上例 ii) は Afm. に分類していたが、今回修正した。
- 13) 一世紀前の 14 世紀に既に、韻文を含めた Chaucer の作品では、 ϕ -inf の使用が極めて高いという事実があり、それは、助動詞 *ought* が両不定詞と共に共起可能であるという捉え方が韻律上の要求と一致していたことを裏付けている。ちなみに、Matsuse (1987: 43-44) で指摘した、*The Canterbury Tales* における助動詞 *ought* と ϕ -inf との共起率は、78% [ϕ -inf : (*for*) *to*-inf = 39 : 11] であった。
- 14) ここでは、「be + *to*-inf」構文については除外して考えている。
- 15) Singh (2005: 30) などでもこれを pre-modals と見なしているが、Warner (1993: 172-173) は、既に modal の資格があったとして、modal group と呼んでいる。
- 16) 佐久間 (2009: 48-49) は、「ネイティブスピーカーが *ought to* を助動詞として認識していない」とする根拠を、「You *ought not say* that.” や “You *ought not have* done it.” という表現を聞いたり使ったりするアメリカ人の例を挙げながら、「彼らが *to* の有無をまったく気にしていない」からと述べている。しかしこれはむしろ、安藤 (2007 [2003]: 185) が言うように、「遅ればせながら、*ought* が真の法助動詞の仲間入りをしようとしている徴候である」(下線は筆者) と考えるべきであろう。
- 17) Matsuse (2009a: 49-50) で指摘したように、音韻的モチベーションもある。準法助動詞 *have got to* が *gotta* になるように、*ought* もしばしば *oughta* となり、不定詞標識は音韻的にむしろ助動詞の一部として捉えられやすいことも、*ought* の純然たる助動詞化を押し進める一因となっていると思われる。
- 18) K. Burridge, “From modal auxiliary to lexical verb: The curious case of Pennsylvania German *wotte*”, in R. M. Hogg & L. van Bergen, (eds.), *Historical Linguistics 1995, vol. 2: Germanic Linguistics*, (Amsterdam: Benjamins, 19-33). Fischer (2007) の引用による。

参考文献

- 安藤貞雄. 2007 [2003]. 英語史四章. 『英文法を探る』東京: 開拓社, 181-192.
- Beadle, R. & Richmond, C. (eds.) 2005. *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century*. Part III. Early English Text Society, S.S., 20. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Davis, N. (ed.) 2004 [1971/76]. *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century*. Parts I & II. Early English Text Society, S.S., 20. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Fischer, O. 1992. (Middle English) syntax. In N. Blake (ed.), *The Cambridge History of the English Language*, vol. II, 1066-1476. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 207-408.
- Fischer, O. 2007. *Morphosyntactic Change*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Gies, F. & Gies, J. 1998. *A Medieval Family: The Pastons of Fifteenth-Century England*. New York: HarperCollins. (= ギース, フランシス & ギース, ジョゼフ. 三川基好訳. 『中世の家族—パストン家書簡で読む乱世イギリスの暮らし—』東京: 朝日新聞社, 2001 年.)
- 橋本功. 2005. 『英語史入門』東京: 慶應義塾大学出版.
- Hock, H. H. & Joseph, B. D. 2009. *Language History, Language Change, and Language Relationship: An Introduction to Historical and Comparative Linguistics*. 2nd and revised edition. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hopper, P. J. & Traugott, E. C. 2003. *Grammaticalization*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Kurath, H. et al. (eds.) 1956-2001. *The Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press.
- Kuteva, T. 2001. *Auxiliation: An Inquiry into the Nature of Grammaticalization*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Lightfoot, D. 1979. *Principles of Diachronic Syntax*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Los, B. 2005. *The Rise of the To-Infinitive*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Matsuse, K. 1987. *On the Use of the Infinitive in The Canterbury Tales*. Unpublished MA thesis submitted to Kyushu University.
- 松瀬憲司. 1996. 15 世紀の英語散文版 *Secreta Secretorum* の形態・統語現象. 『熊本大学英語英文学』, 39, 67-85.
- Matsuse, K. 2009a. Lexical or auxiliary: *dare*, *need*, and *ought* in the Paston Letters. *Kumamoto Studies in English Language and Literature*, 52, 31-55.
- Murray, J. A. H. et al. (eds.) Prepared by J. A. Simpson & E. S. C. Weiner. 1989. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- Mustanoja, T. F. 1960. *A Middle English Syntax*. Part I. *Parts of Speech*. Helsinki: Société Néophilologique.
- 佐久間治. 2009. 『ウソのようなホントの英文法』東京: 研究社.

Singh, I. 2005. *The History of English: A Student's Guide*. London: Hodder Arnold.

田島松二. 1990. Late ME における Ought の発達. 秦宏一他編. 『英語文献学研究－小野茂博士還暦記念論文集－』東京：南雲堂, 227-248.

内桶真二編. 2004. *A Concordance to Paston Letters*. CD-ROM 版. 岡山：大学教育出版.

Warner, A. R. 1993. *English Auxiliaries: Structure and History*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.